

CULTURE AND LANGUAGE No.79

英語の不定詞と動名詞の総称性について

後藤 善久

1. はじめに

本稿では総称性 (genericity) の視点から英語の不定詞と動名詞を分析する。総称性の解釈が与えられる文では、その文によって描かれる出来事が多少とも規則的に起こることが予想される。(1a)の例文では、John が煙草を吸う行為を繰り返す可能性が高く、煙草を吸う行為が習慣として繰り返すことが総称的・一般的特性として表現されている。個別の事実や具体的なエピソードとして解釈されない点で、総称的な文(1a)は(1b)と対照的に位置付けられる。

- (1)a. John smokes.
- b. John arrived.

不定詞と動名詞の総称性、特に、補語(目的語)の位置に現れる不定詞(不定詞補文)と動名詞(動名詞補文)については、Egan(2008)で詳しく分析されている。例えば、(2a)と(2b)の文では、動詞 *continue* の補語の位置に不定詞補文と動名詞補文がそれぞれ現れているが、総称性に関して対照的な解釈が与えられる。

- (2)a. From the mint Canada continues to produce coins with an aviation theme.
- b. ‘You talk, I’ll listen,’ Marler replied and continued piling marmalade on his buttered toast.

(2b)では、動名詞補文によって描かれている行為(すなわち、トーストにマーマレードを塗り重ねる行為)は、一度の場面で複数回繰り返されている行為を意味している。それに対し、(2a)の不定詞補文には、コインの発行が一度の場

英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

面で連続的に繰り返されるという解釈ではなく、コインの発行という行為が間隔を空けて繰り返し行われるという総称性の解釈が与えられる。Egan は、不定詞はその本質的特性として総称性の解釈が可能である一方、動名詞はそれを補部にとる動詞との間に同時性の関係を示すことが特性であり、同時性と総称性は相いれない性質であることから、動名詞補文は総称性の解釈を持つことが不可能であるという説明をしている。

しかし、Egan の説明は不十分である。彼自身が指摘しているように、不定詞と動名詞が動詞 *begin* や *start* の補部に現れる時には、不定詞補文だけではなく動名詞補文も総称性の解釈が可能な場合がある。

- (3) ‘When cocaine was made cheaper in the form of crack, that’s when things started dying, that’s when more crimes started happening, that’s when more people started dropping out of school to make that dollar.’

上の例文(3)で、*start* の補部に現れる *dying*, *happening* や *dropping* は特定の場面に実現した状況を描写しているのではなく、それらの状況が適当な場面に繰り返し実現したことを意味していることから、彼の予測に反して動名詞補文も総称性の解釈が可能であることを示している。

なぜ *continue* の補部では不定詞と動名詞との間に総称性に関する違いが見られ、それとは逆に、なぜ *start* や *begin* の補部では両者が同じように総称性の意味解釈が可能なのかについて理論的に妥当な説明を与えるのが本稿の目的である。

2. 動詞 *continue* の不定詞補文・動名詞補文のイベント

2.1. イベント項の同定

Davidson(1967)に従い、動詞はその項構造(argument structure)の中にイベントを指定する項(イベント項)をもっていると仮定し、その特別な項を *e* として表

示する。Davidson 的な枠組みでは、(4a)の *run* のような動詞は、(4b)で示されたように、走る行為をする人を表す動作主(Agent)を項構造に持つだけではなく、イベント項をも項構造に持つ2項(two-place)述語である。

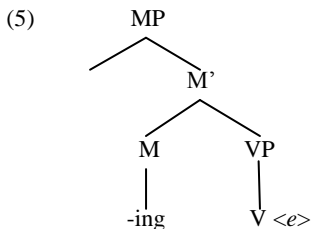
- (4)a. John ran.
 b. run : <x, e>

動作主のような主題役(θ 役)は1つの項(an argument)に一对一の対応関係で付与されると考えられているのに対し、主節のイベント項 e は、Higginbotham(2004)で主張されているように、主節の時制要素 T(=Tense)によって同定(identify)されると仮定する。Higginbotham は[-past]をイベント項 e と話者の発話 u (the speaker's utterance)との間の時間的オーバーラップ(overlap)もしくは包含(inclusion)の関係と捉え、そのオーバーラップの関係を $e \approx u$ と表示している。また、[+past]を $e < u$ (anteriority)として、[+future]を $e > u$ (posteriority)として表している。同定をどのように表記するかは以下の議論にはほとんど影響しないので、主節動詞がイベント項を持ち、そのイベント項が T によって同定されるという Higginbotham の基本的な提案のみを仮定した上で、補文動詞が持つイベント項の同定の問題を次に扱うことにし、動詞 *continue* とその動名詞補文との関係を 2.2 節で、不定詞補文との関係を 2.3 節でそれぞれ取り上げる。

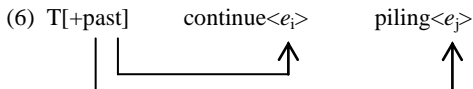
2.2. 動名詞補文のイベント項の同定

動名詞補文が *continue* の補部に置かれたとき、その補文のイベント項 e がどのように同定されるかを分析するためには、動名詞補文がどのような構造を持つかを最初に論じなければならない。本稿では Miller(2002)の提案を採用し、動名詞構文の-ing は(5)で示されているように Mood 句(MP)の主要部 M に置かれると仮定する¹⁾。

英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）



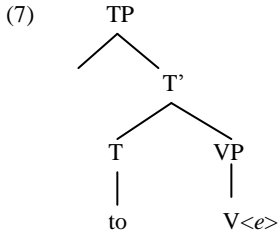
2.1 節で論じたように、動詞が持つイベント項は時制要素 T によって同定されなければならないが、動名詞補文は T の投射を持たない構造であるため、動名詞補文の最大投射である MP 内には、イベント項を同定できる要素が存在しないことになる。このように動名詞補文内部に同定可能な時制要素 T がない場合は、さらに上位の位置にある T による同定の可能性が予測される。実際に、動名詞構文が *continue* の補部に置かれると、動名詞補文のイベント項が実行される時間（イベント時間）と *continue* が持つイベント項 e が実行されるイベント時間は一致すると解釈される。これを(2b)を例にして示すと、主節の動詞 *continue* のイベント項 e_i は [+past] の素性を持つ主節の T によって同定される。より具体的に言うと、T の [+past] は Marler が返事をした時間とほぼ同じであり、この過去の特定された時間と e_i のイベント時間は一致する。動名詞補文のイベント項 e_j はマーマレードを塗るイベントを指すが、 e_j が実行されたイベント時間も Marler が返事をした時間とほぼ同じであり、主節の T と e_i のイベント時間が一致するのと同様に、T と e_j のイベント時間も一致する。(2b)の主節の T と e_i と e_j の関係は下の(6)のように表すことができる。



2.3. 不定詞補文のイベント項の同定

不定詞節には、(7)で示されたように、*to* が主要部 T である句(=TP)が投射さ

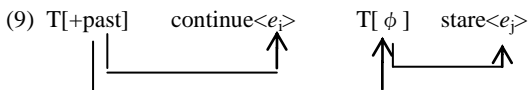
れると一般的に分析されている。



動詞のイベント項 e は T によって同定されなければならないと仮定したが、(7)から明らかのように、不定詞補文のイベント項はその補文内にある T によって同定される。2.2 節で論じたように、主節の動詞 *continue* は、それ自身のイベント項が主節の T によって同定されることに加え、主節のイベント時間と不定詞補文のイベント時間が同時であることを要求する。例えば、下の(8)の不定詞補文は、(2a)とは異なり、総称性の解釈ではなく単一の場面で実現された行為という解釈を与えられ、主節動詞の *continue* と不定詞補文の動詞 *stare* は過去の特定の時間に同時に実現されていなければならない。

(8) The nurse continued to stare disapprovingly.

主節のイベント項が主節の T によって同定され、補文のイベント項が補文の T によって同定されると仮定したが、さらに、不定詞補文の T はそれ自身 [+past]などの時制に関する固有の素性を持たないため、主節の T と T-連鎖(T-chain)の関係的形成することで値が与えられると仮定すると、(8)は(9)のような同定の関係を示すことになる。



英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

動名詞補文のイベント項の同定を表した(6)と不定詞補文のイベント項の同定を表した(9)を比較すると、同定が直接的(動名詞の場合)か間接的(不定詞の場合)かの違いはあるが、最終的には、補文のイベント項が主節の T によって値が決定されることは両者とも同じである。しかし、総称性の解釈に関して、補文の T の有無が決定的な違いを生むことを 3 節で示す。

3. 動詞 *continue* の不定詞補文・動名詞補文の総称性について

3.1. G-演算子

Chierchia(1995)は、G-演算子(the General Operator)を仮定し、数量副詞(adverbs of quantification)と G-演算子が同じ性質を有するとことを示し、数量副詞(Q-adverb)に対して提案した分析に基づき総称性を説明している。特に、Chierchia は、数量副詞 *always* が現れる(10a)に対し(10b)のような論理形式(LF)を与え、*always* の解釈が G-演算子の解釈に非常に近いと主張している²⁾。

(10)a. Fred always smokes.

b. $\forall s$ [C(f, s)] [smoke(f, s)]

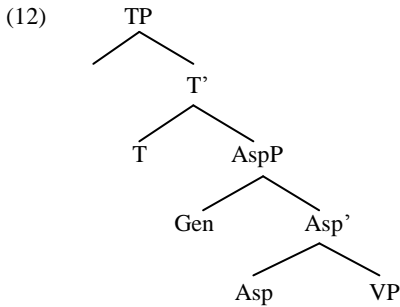
(10b)で示されているように *always* は普遍数量詞 \forall として変換される。C は個人(individual)と状況・場面との関係を表した 2 項述語に似た変項であり、普遍数量詞 \forall の量化の範囲は、文脈によって特定される Fred を含む場面の集合(a set of contextually specified occasions)によって制限される。つまり、文脈によって特定された場面に Fred が置かれた状況と Fred が煙草を吸う状況とが全てオーバーラップすると(10b)は意味していることになる。

G-演算子が音声的に空の数量副詞であるという仮定に従うと、(11a)の例文は(11b)で示したような統語構造を持ち、それは(11c)のような論理形式を与えられる。

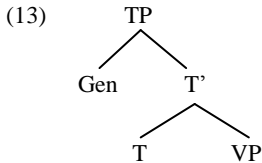
- (11)a. Fred smokes.
 b. [_{IP} Fred_i [_{Gen} [_{VP} t_i smokes]]]
 c. Gen s [_C(f, s)] [smoke (f, s)]

(11c)の変項 C には Fred が煙草を吸うのにふさわしい状況(felicity conditions)が値として与えられ、この論理形式は、Fred が煙草を吸うのにふさわしい状況と Fred が煙草を吸う状況がオーバーラップすることを意味している。

G-演算子が音声的に空の数量副詞であるという主張に加え、下の(12)で示されているように、G-演算子は構造的にはアスペクト句(an aspectual projection=AspP)の指定部に生成されると Chierchia は仮定している。



本稿では、G-演算子はアスペクト句の指定部ではなく、(13)で示したように TP の指定部に生起すると仮定する³⁾。この仮定は強い経験的証拠から導かれたものではなく、以下の節で詳しく扱う不定詞補文と動名詞補文の総称性の違いを説明するための理論的必要性に基づくものである。



英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

3.1 節では、主節(時制節)が総称的解釈を受ける場合、主節には G-演算子が存在するという分析を提示した。以下の節では、この枠組みに基づき、不定詞補文および動名詞補文を考察する。

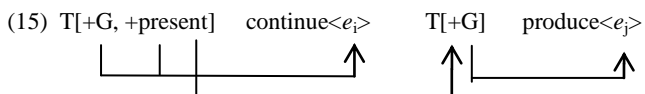
3.2. 動詞 *continue* の不定詞補文の総称性

総称性の解釈を与えられる不定詞を補語にとる場合、主節動詞の *continue* も総称性の解釈を持たなければならない。これは今まで見逃されてきた重要な事実であると考えられる。例えば、(2a)の例文では、(下に(14a)として再掲)、コインの発行という不定詞補文が表す行為には総称性の解釈を与えられるが、それに加え、主節の T が現在時制を持つために *continue* のイベント項は特定の時間に行われる解釈ではなく総称性の解釈を与えられる。

(14)a. From the mint Canada continues to produce coins with an aviation theme.

b. We do strongly recommend that you continue to weigh yourself regularly.

(9)で示したような T とイベント項との間の同定の関係で見ると、(14a)は(15)のように分析できる。



主節の T の指定部に G-演算子が現れることによって主要部 T が総称性の素性 [+G] も持つと仮定する。2.1 節で述べたように、T によって同定される動詞 *continue* のイベント項 e_1 は総称性と現在([+present])の解釈を与えられることになる。さらに、不定詞補文の T の指定部にも G-演算子の生起が可能であるから、G-演算子が現れた場合には補文の T には [+G] の素性が与えられ、それによって同定される不定詞補文のイベント項 e_2 にも総称性の解釈を与えられる。

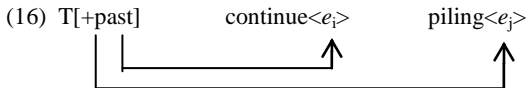
また、補文の T は主節の T との T-連鎖によって[+present]の解釈を与えられる。これが不定詞補文と主節の両方が総称性の解釈を与えられるシステムである。

この節で提案した分析で重要な点は、不定詞補文には主要部 T とその投射である TP が生成され、G-演算子が生起可能な構造を持っていることである。T および TP の存在が総称性の解釈に関して重要な役割を果たしていることを、次の 3.3 節で取り上げる動名詞補文の分析との対比から明らかにする。

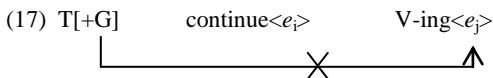
3.3. 動詞 *continue* の動名詞補文の総称性

1 節で述べたように、(2b)のような動名詞が *continue* の補部に置かれた場合には、動名詞補文は総称性の意味を持たない。この事実は、2.2 節で論じた動名詞補文は T の投射がないという動名詞構文の統語的特徴と、3.1 節で論じた G-演算子が TP の指定部に生成されるという仮定から導くことができる。つまり、総称性の解釈を与える G-演算子の生起に必要な T の投射をもたない動名詞補文は総称性の解釈を持たないことが導かれる。

ただし、ここで解決しなければならない理論的な問題がある。2.2 節の(6)で示したように、((16)に再掲)、動名詞補文のイベント項は主節の T によって同定される。



この同定のシステムが正しいとするならば、主節の T が[+G]を持っている場合に、この素性が動名詞補文のイベント項に受け継がれることで、動名詞補文にも総称性の解釈が可能であると誤って予測されてしまう。この問題を解決するためには、(17)のような関係が排除されることを示さなければならない。



英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

この問題に対する解決法を提示するために、その前提となる枠組みである Diesing(1992)の Mapping Hypothesis(18)を簡単に考察し、結果として、(18)に若干の修正を加える。

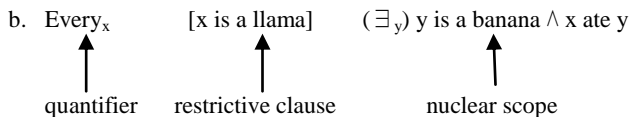
(18) Mapping Hypothesis

Material from VP is mapped into the nuclear scope.

Material from TP is mapped into a restrictive clause.

Mapping Hypothesis は、*every* のような数量詞を含む文の論理表示は「quantifier」と「restrictive clause」と「nuclear scope」の3つの部分に分かれるという Kamp(1981)と Heim(1982)の分析を発展させた仮説である。Kamp や Heim の枠組みでは、例えば、(19a)の例文の論理表示は(19b)のようになる。

(19)a. Every llama ate a banana.



Diesing が提案した Mapping Hypothesis で最も重要な点は、ある文の論理表示と統語構造には対応関係があり、論理表示が3つの部分に分かれるかどうかはその文の統語構造によって決定されると主張していることである。例えば、(19a)の文には(20)のような統語構造が与えられる。

(20) [_{TP} Every llama [_{VP} ate a banana]]

上の統語構造から明らかなように、主語の *every llama* は VP の外にある TP の指定部に位置しているので、(18)に従うと、この要素は論理表示では restrictive clause に写像されることになる。一方、VP 要素である *ate a banana* は論理表示では nuclear scope へと写像される。

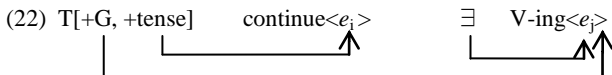
Diesing の提案では restrictive clause と nuclear scope とのどちらに写像されるかを分ける統語構造上の境界は VP である。本稿では、写像を決定する統語構造的境界は MP であると仮定し、(18)を(21)のように修正する。

(21) Mapping Hypothesis (修正版)

Material dominated in MP is mapped into the nuclear scope.

Material from TP is mapped into a restrictive clause.

ここで、新たに修正された(21)に基づき(17)が不可能である理由を説明する。2.2 節で動名詞補文の最大投射は MP であると仮定したことから、(21)に従うと、動名詞補文の全ての要素は nuclear scope に写像されることになる。つまり、動名詞補文は nuclear scope に写像され、その補文内にあるイベント項 e_j は存在数量詞(the existential quantifier)に束縛(bound)されなければならない。動詞 *continue* の動名詞補文は、主節の T から [+G] と [+tense] を受け継ぐと仮定すると、(22)で示したように、動名詞補文は G-演算子と存在数量詞の両方から束縛されることになり論理形式的に違反を引き起こすことになる。



主節が総称性の解釈を必要とする場合は、その動名詞補文が総称性の解釈を持つことは不可能であることが結果として導かれる。

以上、3 節では動詞 *continue* の補文の総称性の解釈に関して、補文の T の有無が決定的な違いを生むことを論じてきた。次節では、*start* や *begin* の補部では不定詞補文と動名詞補文が総称性に関して同じ意味解釈を示す理由について考察する。

4. 動詞 *start/begin* の不定詞補文・動名詞補文の総称性について

4.1. 動詞 *start/begin* と動詞 *continue* との比較

1 節で指摘したように *continue* とは異なり、*start/begin* の補語に置かれた動名詞補文は不定詞補文と同じように総称性の解釈が可能である。下の(23a)の例文は総称性の解釈が与えられる不定詞補文であり、(23b)は(3)の例文と同様に総称性の解釈が与えられる動名詞補文である。

(23)a. Leon and Ruth's marriage had been in trouble for years. Despite numerous tense situations, their friends supported them both and did what they could do to keep the two together. Last month they finally split up – they say that it is a trial separation. Yet just as soon as they separated, *their friends began to take up sides*.

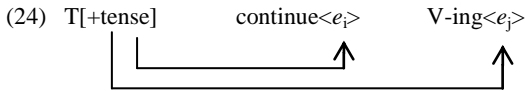
b. Like many other coastal shipping companies it met hard times after the First World War, when *motor lorries began taking* the general cargoes that used to go by sea to all the little ports.

(23a)では友達たちが元夫婦のどちらか一方の肩を持つ状況(イベント)が繰り返し起こり、(23b)では貨物自動車一般貨物を運ぶ状況が繰り返し起こる。

ここで、*continue* と *start/begin* の大きな違いを 2 点指摘し、その違いが総称性の違いに大きくかかわっていることを論じる。1 点目の違いは、主節動詞の総称性の違いである。3.2 節で述べたように、主節の動詞が *continue* の場合は主節のイベント自体が適当な間隔で繰り返されなければならなかった。つまり、続ける行為自体が総称性の解釈を与えられなければならなかった。これに対し、*start/begin* の場合、補文で描かれた行為が繰り返さるのであって、開始する行為が適当な間隔で繰り返されるのではない。言い換えると、総称性の解釈を与えられるのは補文のイベントであって、主節のイベントではない。

つまり、*start/begin* の動名詞補文のイベント e が総称性の解釈を与えられる場合は、 e が e_1, e_2, \dots, e_n のような複数のイベントを持つことになる。

2 つ目の違いは、主節のイベント時間と補部のイベント時間の関係である。*continue* の場合、主節のイベント時間と補部のイベント時間は同時であり(主節のイベント時間=補部のイベント時間)、補部のイベント時間は主節のイベント時間によって特定される。これを 3.3 節の(16)と同じように示すと(24)のようになる。



それに対し、*start/begin* の場合、補部のイベント時間は主節のイベント時間の後であることが決まるだけで(主節のイベント時間<補部のイベント時間)、それだけでは補部のイベント時間が特定される訳ではない。

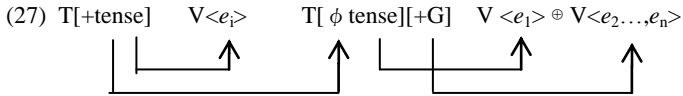
これらの違いを詳しく考察するために、(14)の文(= (25a))が文法的であるのとは対照的に、なぜ(25b)は総称性の解釈が不可能な容認性の低い文なのかについて 3.3 節を補足する形で改めて分析する。

(25)a. From the mint Canada continues to produce coins with an aviation theme.

b. *From the mint Canada continues producing coins with an aviation theme.

(25a)ではコインを発行するイベント e が繰り返し行われる解釈が可能であるから、それを正しく示すために、 e を e_1, e_2, \dots, e_n のように複数のイベントとして表すことが妥当である。同様に、仮に(25b)でコインを発行するイベントが繰り返し行われた状況を想像すると、動名詞補文は複数のイベント(e_1, e_2, \dots, e_n)を持つことになる。しかし、*continue* の補部のイベント時間は主節のイベント時間と同時になければならないという条件により、時間の観点から見ると

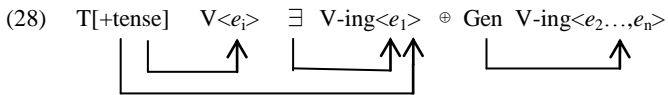
算子の変項の役割を果たす。要するに、動詞 *start/begin* と不定詞補文との関係は(27)のようになる。



イベント項が単一(monadic)イベント e であろうと 2 部分からなる(dyadic)イベント $\langle e_1 \rangle \oplus \langle e_2 \dots e_n \rangle$ であろうと、結局、不定詞補文内には G-演算子とそれによって束縛される変項の両方が存在し、それによって総称性の解釈が可能になることが示された。

4.3. 動詞 *start/begin* の動名詞補文の総称性

動詞 *start/begin* の動名詞補文に総称性の解釈が与えられる文は、次のようにイベント項が同定されると考える。



ここで注目すべき点は、不定詞補文の場合と同様に動名詞補文のイベント項が $V\text{-ing}\langle e_1 \rangle \oplus V\text{-ing}\langle e_2 \dots e_n \rangle$ のように 2 分割され、 $\langle e_2 \dots e_n \rangle$ が G-演算子の変項の役割を果たしていることである。この変項の存在が動詞 *continue* と動詞 *start/begin* との間の総称性の違いをもたらす決定的な理由である。

2 分割されたイベント項の後半部分 $\langle e_2 \dots e_n \rangle$ が G-演算子の変項となるという提案によって動名詞補文の総称性が導かれることを明らかにしたが、この提案は 3.3 節で論じた Mapping Hypothesis と矛盾してしまうことが残された問題である。つまり、動名詞補文の最大投射が MP であるならば、動詞 *start/begin* の動名詞補文も MP であるから、イベント項の後半部分 $\langle e_2 \dots e_n \rangle$ も nuclear

英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

scope に写像されることが Mapping Hypothesis によって要求され、G-演算子の生起が不可能となってしまうことが問題となる。

これを解決する方法の一つとして、動詞 *start/begin* の動名詞補文はイベント項が2分割されるだけでなく、統語構造的にも2階層構造をしており、さらに、下の階層には TP の投射が存在し、この TP の指定部に G-演算子が生起するという新たな提案を提示する。この提案に従うと、動詞 *start/begin* の動名詞補文は次のような統語構造を持つことになる。

(29) $\text{start/begin} [_{\text{MP}} \text{-ing} [_{\text{VP}} \text{V} \langle e_1 \rangle [_{\text{TP}} [_{\text{T}} \text{T}] [_{\text{VP}} \text{V} \langle e_2 \dots e_n \rangle]]]]$

この提案は妥当性を欠くものではないが、これを支持する経験的な証拠を現段階では見つけられず、解決すべき今後の研究課題としたい。

5. 結論

動詞 *continue* の補部では不定詞と動名詞との間に総称性に関する違いが見られるのはなぜか、それとは逆に、*start* や *begin* の補部では不定詞も動名詞も同じように総称性の意味解釈が可能なのはなぜかについて理論的に妥当な説明を与えるのが本稿の目的であった。

最初の問いに関しては、G-演算子が生成される TP の有無が大きく関係していることを2節と3節で示した。2番目の問いに関しては、*start/begin* の補文のイベント項は複数のイベント項 e_1, e_2, \dots, e_n で構成され、さらに、それが $\langle e_1 \rangle \oplus \langle e_2, \dots, e_n \rangle$ のように2部分から構成されていることを提案し、動名詞補文の場合は $\langle e_2, \dots, e_n \rangle$ の部分が G-演算子の変項として機能することを4節で論じた。

最後に、本稿の主張をまとめると以下ようになる。

	TPの有無
不定詞補文	有
動名詞補文	無

CULTURE AND LANGUAGE No.79

	補文のイベント項	G-演算子の生起の可能性
continue+不定詞補文	単一(monadic)イベント e	有 (主節の TP と補文の TP)
continue+動名詞補文	単一(monadic)イベント e	無
start/begin+不定詞補文	2部分からなる(dyadic)イベント $\langle e_1 \rangle \oplus \langle e_2, \dots, e_n \rangle$	有 (補文の TP)
start/begin+動名詞補文	2部分からなる(dyadic)イベント $\langle e_1 \rangle \oplus \langle e_2, \dots, e_n \rangle$	有 (補文の VP 内部の TP)

[注]

- 1) -ing の素性および-ing が結合(Merge)される統語的位置に関しては後藤(2012)を参照。
- 2) (10b)で表された論理形式では、Chierchia(1995)に従い *situation*(=s)という表現を用いている。situations は厳密には events と states の両方を包含する用語であるが、本稿では、Davidson(1967)が提案したイベント項 e と Chierchia が仮定している s とは同じ役割を果たしていると見なす。
- 3) 厳密に言うと、TP の指定部には主語が移動するため、G-演算子は TP に付加した位置に生起する。

[参考文献]

- Chierchia, G. 1995. "Individual-level Predicates as Inherent Generics." In G.-N. Carlson and F.J. Pelletier, eds., *The Generic Book*, 176-223. Chicago: University of Chicago Press.

英語の不定詞と動名詞の総称性について（後藤）

- Davidson, D. 1967. "The Logical Form of Action Sentences." In N. Rescher, ed., *The Logic of Decision and Action*, 81-95. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Diesing, M. 1992. *Indefinites*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Egan, T. 2008. *Non-finite Complementation: A Usage-based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*. Amsterdam: Rodopi.
- 後藤善久. 2012. 「英語の動名詞構文」『札幌大学女子短期大学部紀要』第58・59合併号, 33-50.
- Kamp, J.A.W. 1981. "A Theory of Truth and Semantic Representation." In J. Groenendijk, T. Janssen, and M. Stokhof, eds., *Formal Methods in the Study of Language*, 277-321. Amsterdam: Mathematical Center.
- Krifka, M., F.J. Pelletier, G.N. Carlson, A. ter Meulen, G. Chierchia, and G. Link. 1995. "Genericity: An Introduction." In G.-N. Carlson and F.J. Pelletier, eds., *The Generic Book*, 1-124. Chicago: University of Chicago Press.
- Heim, I. 1982. "The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases." Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Higginbotham, J. 2004. "The English Progressive." In J. Guéron and J. Lecarme, eds., *The Syntax of Time*, 329-358. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Miller, D.G. 2002. *Nonfinite Structures in Theory and Change*. Oxford: Oxford University Press.